

# 《創世記

## 8章1節～22節》

◆ 読んで・聴いて 思い巡らそう

### 【メモ・Memo】

- 心に届いたみ言葉
- 時代への呼びかけ
- 「悔い改め」

- 気づき
- 教会に示されたこと
- イエスさまとの関連

## ◆ 聖書味読 翻訳の違い

## 創世記 8章1節

## 【新共同訳】

神は、ノアと彼と共に箱舟にいたすべての獣とすべての家畜を御心に留め、地の上に風を吹かせられたので、水が減り始めた。

## 【聖書協会・共同訳】

神は、ノアと彼と一緒に箱舟にいたすべての獣、すべての家畜を忘れることなく、地上に風を送られたので、水の勢いは収まった。

## 【口語訳】

神はノアと、箱舟の中にいたすべての生き物と、すべての家畜とを心にとめられた。神が風を地の上に吹かせられたので、水は退いた。

## 【70人訳 ギリシア語聖書】

神はノアを思い起こした、それに彼と一緒に箱船の中にいたすべての獣と、すべての家畜と、すべての鳥と、すべての這うものをも。神は地の上に息を吹いて、水（かさ）を低くした。

## 【フランシスコ会訳】

神は、ノアと、箱船の中にノアとともにいたすべての獣と、すべての家畜を思い起こされた。そこで神が地上に風を送られると、水は治まった。

【新改訳2017】

神は、ノアと、彼とともに箱舟の中にいた、すべての獣およびすべての家畜を覚えておられた。神は地の上に風を吹き渡らせた。すると水は引き始めた。

【岩波訳】

神はノアおよび彼と共に箱船に〔入って〕いたすべての獣とすべての家畜のことを思い起こし、地の上に風を吹き渡らせた。そこで水はおさまった。

【LB】

船の中のノアと動物のことを、神様は決して忘れませんでした。やがて神様が風を吹きつけると、水はしだいに引き始めました。

【TEV】

God had not forgotten Noah and all the animals with him in the boat; he caused a wind to blow, and the water started going down.

**◆ み言葉を生き み言葉を伝えるために****① 8章の構成 大枠で4部**

- 1) 1-5節 降雨の終止と減水
- 2) 6-12節 減水状態の調査
- 3) 13-19節 箱舟を出る
- 4) 20-22節 祭壇と神の約束

**② 箱舟におけるノアたちの生活は安全だった。だが、異常な状態でもあった。雨がやみ、地上を厚くおおっていた水が減退し、箱舟から出る日が待たれた。**

7:24「百五十日の間」は長すぎた。10節・12節に「待つ」が2度用いられる。

**③ ノアは手をこまねいていたのではない。なすべきことをなしつつ、時が来るのを待つのである。信仰生活、日常生活においても必要なこと。**

(ア)「鳥(カラス)」を放ち

(イ)7日の間をおいて、「鳩」を、8節、10節、12節で3度放つ。

④ 箱舟は「アラト山」に漂着した。ちょうど、天地創造の時と同じように、神さまは「風」を吹かせて水を退けられた。

⑤ ノアは調査はしたけれど、自ら扉を開けることはしない。神が戸を閉ざされたのと同様に、主が扉をあけられることを待った。自分で開くべきではない、と考えた。

ノアを決定づけたのは、観察結果でも、調査でもない。神のみ言葉だった。

⑥ 鳩が11節・「オリーブの葉」を加えてくる。この若葉、ノアのあずかり知れぬところで、新しい命を芽生えさせ、育てられている神のみ業の象徴とも読める。

⑦ 箱舟を出たノア。最初になしたことは、20節「主のために祭壇を築く」ことだった。

ノアはまず、礼拝した。供え物をした。大切なのは第一が「祭壇を築くこと」「感謝」だということ。

【8:20 ノアは主のために祭壇を築いた。そしてすべての清い家畜と清い鳥のうちから取り、焼き尽くす献げ物として祭壇の上にささげた。】

佐藤彰牧師は『まるかじり創世記』で次のように語る。

私たち罪人がみ前でなしうること。それは、失敗のない無難な生き方ではない。それを追い求めることでもない。失敗はあっても、その都度、主のみ前に立ち帰り、新たなる気持ちで祭壇を建て直し、礼拝する生活に戻ることにほかなりません。何度でも、人生の途上で祭壇を築き直すのです。

…私たち罪人は、祭壇を築き直す以外に、真に立ち帰る道はありません。いや、むしろ、祭壇を築き直して、やり直してみる道が、今なお私たちには残されているのです。

⑧ 神が1節「御心に留め」られたということ。大切な事である。そこには、私たちの大きな救いが見えてくる。

⑨ 1節の「地の上に風が吹いた」ことは何を意味しているのか。思い巡らす必要がある。

⑩ 6:18で「箱舟に入りなさい」と命じた神は、8:16で「箱舟から出なさい」と命じる。

⑪ 21節「人が心に思うことは、幼いときから悪い」は、

人間の悪の深刻さ、そして、神の嘆きをあらわす。

⑫ 同時に、21節「わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい」は、裁きにおける神の愛の痛みをあらわしている。

(以上)